

NIIGATA Central park

～川が舞台、人が主役～



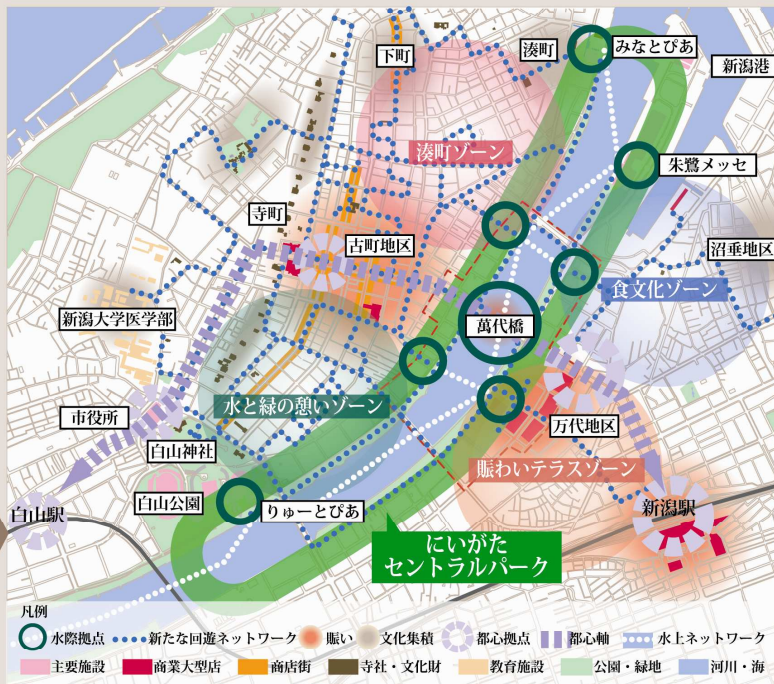
セントラルパークをつくり2つのまちを1つのまちに

明治：川と共に暮らすまち



水運が主要であったため、堀が張り巡り、川が生活に密着していた。左岸は、川と平行する道「通り」と直行する道「小路」で構成され古町を中心に賑わいをみせていた。右岸は北側に沼垂町、南側の砂丘列に鳥屋村があり、周辺は田畑が広がっていた。その両岸を萬代橋が繋いでいた。

将来都市像の提案：セントラルパークを中心とした1つのまち

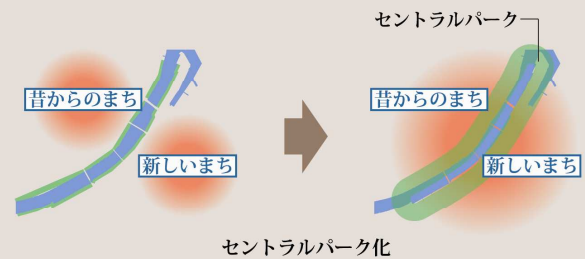


●信濃川を公園化してまちの中心にする

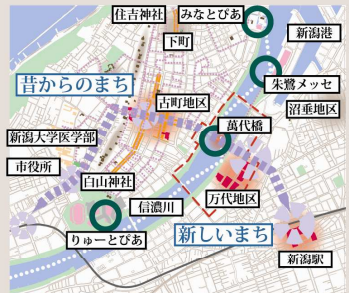
昔からのまちと新しいまちの接点となり、空間の広がりのある信濃川沿いを、「都心のセントラルパーク」として位置付ける。信濃川に向き合ってきた新潟のまちを、信濃川を中心に1つのまちとして融合させ、川の恵みを受受できるような親水公園として活用していくことで、セントラルパークを中心とした1つの魅力的なまちとして再生し、川を舞台として市民の誇れる新潟ブランドをつくる。

●新たなオープンスペースをつくり、信濃川軸を強化する

セントラルパークの整備により、りゅーとびあから朱鷺メッセ、みなとびあに至る信濃川沿岸に新たなオープンスペースを連担させて、水辺のネットワークを形成することで信濃川軸の強化を図る。新たなオープンスペースは、そこから水と緑がまちへとしみ出す場所となる。



現代：昔からのまちと新しいまち

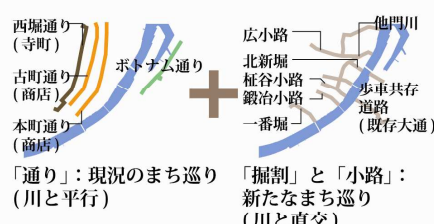


主要交通が鉄道となり、交通の便利な万代地区や駅前周辺地区が発展したが、古町地区は大型店の撤退や空き店舗の増加で衰退し、中心市街地の拠点性が低下してきている。りゅーとびあ、朱鷺メッセなど、信濃川沿いに主要な施設がつくられたが、南北に離れている。

個性あふれる「縁凸（えんでこ）」でまちと川をつなぐ

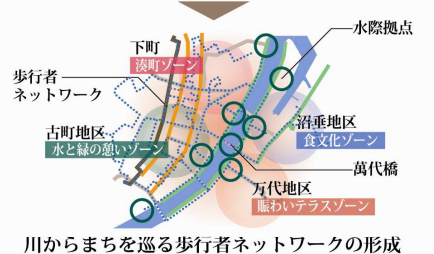
■4つのまちの個性を川に引き出す

昔からあるまちと新しいまち、萬代橋の上流と下流で異なる個性豊かな4つのゾーンごとに、まち巡りの歩行者ネットワークの結節点となる新たな水際拠点「縁凸（えんでこ）」をつくり、まちの賑わいを川へ引き出す。
※えんでこ…方言で「歩いて行こう」の意味。「えんで=歩いて」と「こ=おいで」を表している。



■縁凸を起点としてまちを巡る

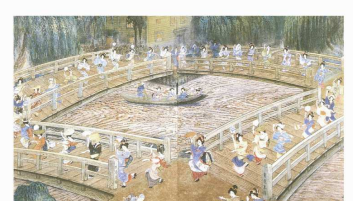
左岸の歴史的な掘割や小路、右岸の既存の大通りを活用して、縁凸を起点としたまち巡りのルートを新たに設ける。信濃川に平行にまちなかを歩く既存の「通り」に対して直交する動線を付加することにより、回遊性ある歩行者ネットワークを形成する。



人が主役となり、川を楽しむ

■川舞台を強化する

江戸時代より橋は庶民のハレの日の場として利用されてきた。今日においても、新潟まつりなど様々な祭事に萬代橋が活用され、新潟をイメージさせるシンボルとなっている。萬代橋や縁凸を中心として、四季折々人々が楽しめるイベントを行いながら、川や橋を見る・見られるの関係を強め、「川が舞台、人が主役」となる場づくりを行う。川には、ブリッジや浮桟橋を新たに設けたり、気軽に利用できる渡し舟を提供することにより、沿岸の回遊性を高める。



昔：銅拍洋「新堀四ツ橋の盆踊り」(出典：新潟市歴史博物館HP)

■親しみやすい日常的な活動の場にする

信濃川沿いの建物低層部を魅力・集客力のあるものとし、信濃川、やすらぎ堤、縁凸が一体となって、水と緑を中心とした界隈性をつくり出す。川を中心として、市民や来街者など多くの人が「集う・巡る・憩う」ことができるようになり、セントラルパークを中心として、安心して川と共に暮らす楽しみを味わえるまちとなる。



今：「新潟まつり」(出典：第14回競技応募要項表紙)

人が主役となる「にいがたセントラルパーク」歳時記

3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
にいがた冬・食の陣	にいがた春・食の陣	萬代橋チュリップフェスティバル	賑わいテラス田植体験	萬代橋サマセットカフェ	萬代橋感謝祭	新潟まつり	にいがた総おどり(縁凸会場)	えんでこウォークラリー	冬の夜景を楽しむ「KORENBO」クルーズ	信濃川ウォーターシャトル Xmas ディナークルーズ	にいがた冬・食の陣
					賑わいテラス田植体験	八海山へ出発 紅葉どうし	信濃川ウォーターシャトル 八海山クルーズ				

春：桜を見ながら休憩 春：屋上で田植え 夏：堀で遊ぶ 秋：堤を走る 冬：灯りを楽しむ

